

タイトル／夢中になれることを見つけて

～どんなことも自分の将来にとってプラスになる！～

出身大学／津田塾大学学芸学部数学科卒

現職／羽村市役所企画総務部東京オリンピック・パラリンピック準備室主査

氏名等／笹本(旧姓小林) 弘子 (高 40)

○仕事について

羽村市役所で仕事をしています。市役所は、高校生の皆さんにとって、あまりなじみのない場所かもしれませんが、どんなイメージを持っていますか？「堅い仕事」、「決められたことだけやればよい」、「収入が安定している」、「5時で仕事が終わって定時に帰れる」などでしょうか。

市役所の仕事は市民の行政手続きのほか、福祉、子育て、都市整備、商工農業、防災、教育など多岐にわたっています。だいたい3年から5年で異動があり、さまざまな部署を経験することができます。法律に基づき業務を遂行する部署もあれば、行政課題をとらえ企画立案から行う部署もあり、内容はさまざまです。異動するごとに業務が変わり、その都度、新しいことを覚えなければならない大変さがありますが、いろいろな仕事ができるという良さもあります。市民と接する機会が多く、直接声を聞くことができることや、地域社会に役立っていることなどやりがいもあります。

私は、平成4年に羽村市役所に入庁し、体育課、企画政策課、会計課、納税課、市民課を経て、平成30年に東京オリンピック・パラリンピック準備室に配属され、現在、来年開催される東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京2020大会という）に向けて、事前キャンプ(※)誘致や大会気運醸成に向けた取り組みを担当しています。

具体的には、昨年2018年11月に、「東京2020大会」事前キャンプの視察を兼ねた形で、キルギス共和国男子柔道チームによる「柔道グランドスラム大阪2018」の事前キャンプを受入れ、同チームに対するサポートやおもてなしのほか、市民との交流事業を行いました。ほかにも、パラリンピアンを招いたイベントの開催やパラリンピック正式競技である「ボッチャ」の体験講座の開催、市主催のイベントに合わせたPRブースの出展など、東京2020大会の気運を高める取り組みを行っています。

東京2020大会は2020年に開催される世界的なイベントであり、一過性のものですが、この大会を契機として、2020年以降も含め、日本や世界全体に対し、スポーツ以外も含めた様々な分野でポジティブなレガシーを残す大会として成功させることが求められており、羽村市でもレガシー（有形・無形の遺産）を創出するため、取り組みを進めています。

東京2020大会まであと1年となり、忙しい毎日ですが、「今年が勝負！」を合言葉に、充実した日々を送っています。

(※)各国オリンピック・パラリンピック委員会や競技団体等が時差や気候への順応のために大会前に任意に行うトレーニングキャンプのこと。アスリートにとっては、最適な環境で事前トレーニングを

行うことにより本番で最高のパフォーマンスを発揮でき、キャンプ受入れ自治体にとっては、地域振興や国際交流の促進が期待できる。

○仕事につくまでのこと

カヌーを抜きにして私の人生を語る事が出来ませんので、まずこのことから触れます。

小学3年生の夏休みに講習会に参加したことがきっかけでカヌーを始めました。水上で自分の体より大きい艇を自由に操れることや、激しい流れを下る爽快感が楽しくて練習にのめりこみ、大人が練習しない寒い冬も練習を続けたことで、小学5年生で大人に混ざって都大会で優勝し、その後、中学3年生のときに全日本選手権で優勝しました。

カヌークラブの先輩が進学したことがきっかけで立高を知り、「自主」、「自立」をモットーとした自由な校風に憧れて、必死で勉強して立高に合格しました。

部活に行事、土日はカヌーにあけくれた日々を過ごし、あまり勉強しなかった高校時代でしたが、大学進学之道を選びました。高校3年生のとき、1992年開催のバルセロナオリンピックで、20年ぶりにカヌースラローム競技が正式種目となることが決定し、オリンピック出場を目指すことに決めたので、就職してしまうとカヌーの練習が出来ず、十分にカヌーが出来なくなってしまうと考えたからです。

運よく自宅から近い大学に合格し、大学生になりましたが、ここでも勉強しない大学生でした。そもそも、オリンピックに出場するために大学の道を選んだわけで、海外遠征資金のためのアルバイトとカヌーの練習に明け暮れた日々でした。

大学2年生のときに初めてワールドカップに参戦し、世界の壁を知りました。初めての海外遠征では、コースが難しく(むしろ怖い)自分の力不足を知りました。そのうえ、言葉もわからない、水も食事も合わない、体調を崩すなど、戦う以前の問題もありました。しかし、オリンピックに出場するためには、世界選手権で出場枠を獲得しないといけないわけですから、翌年の海外遠征に向けて、トレーニングをしながら海外遠征費用捻出のためのアルバイトもしなければなりません。早朝4時に起き、お弁当屋さんのアルバイトをして、9時には大学へ行き、大学が終わると練習場へ直行、帰宅は毎日午後11時頃と、本当に必死の毎日でした。その甲斐あって、大学4年生のときにイギリスで開催された世界選手権でオリンピック出場枠を得ることが出来ました。

大学卒業する年、就職1年目がちょうど1992年バルセロナオリンピックの年であったので、就職のときにも練習環境を最優先にしたいことから、地元である羽村市役所の職員採用試験を受けることとし、運よく採用していただきました。

○みなさんへ

高校、大学時代と勉強はおろそかだった私ですが、夢中になれることを見つけられた私は幸せだったと思っています。進学や就職のときにも、自分の進みたい道を選び、そのために

取り組むべきことを考え、行動してきました。マイナースポーツであるカヌーでオリンピックを目指す道でも、仕事においても、立高時代に培われた「自主自律」の精神が自分を助けられていると感じています。

カヌーで世界にチャレンジしたこの経験の中には、世界に出たことで視野が広がったことや世界に出てみて感じた日本の良さ、個人競技だけれどもたくさんの方に支えられて競技ができることなどを知りました。これらの経験は、市役所の仕事の中でもおおいに生きています。

企画政策課で担当した男女共同参画では、「年齢、性別、職業にかかわらずいきいきと仕事やスポーツをしている」海外の方を見てきたことが役立ちましたし、納税課で担当した滞納整理では、苦しくても粘り強く漕ぎ切ってきたことが役立ったと思っています。

現在の配属先である「東京オリンピック・パラリンピック準備室」では、実際自分が経験してきたことを多くの市民に知っていただくことができる職場です。

東京 2020 大会まで残りわずかです。東京 2020 大会のレガシー（有形・無形の遺産）を次世代へ継承していけるようしっかりと取り組みを進めていきたいと思っています。

立高生の皆さん、目標を持ち、しっかりと歩みを進めてください。

「どんなことも自分の将来にとってマイナスにならない。プラスに働きます。」